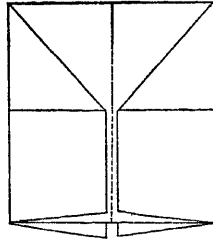
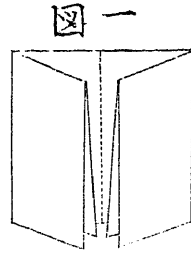


図六



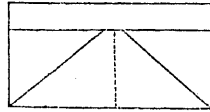
三圖



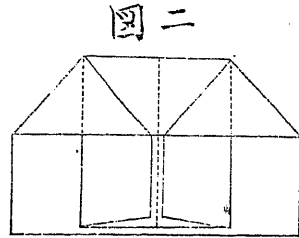
図一



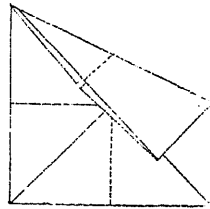
図七



四圖



図二



五圖

十四
に斜に折り、又六圖のよりに折り、中え指を入れ
てひろげて、七圖のよりにいたすのです。

天狗の面

やまとの翁

今から何十年前か前のこと、世は未だ明治とはな
らぬ徳川の時代、こゝに大坂から和歌山へ通ふ道
中に紀見峠として、夫はく峻しい山道があつた、
今ならば、瀧車で以て一時間もかゝらずに、寝て
居て一日の中に何度も往復が出来るのであるが、
其時分には、ぞゝしても此山を越して二日もかゝ
つて歩いて行かなければならなかつたとのこと。
ある年の十二月の大晦日、紀州の、一人の商人、
これは子供の玩具を商人であるが、元正月に賣
る品物を澤山大坂で仕入れて、何んでも明日はあ

正月しがつの元日げんじつだから、今夜こんや中に紀州きしゅうまで歸かへらんければならぬといふので、夜通よどしかゝつて此山路このやまじを越すことに決きめて 大坂おほさかを出發しゅつぱつした。

さてだん／＼道みちを急いそいで、やつて來たが、冬ふゆの日脚ひあしはまことに短みぢかい其上そのうへ澤山たくさんの荷物にもつを脊負せおふて居るのだからどうしても墓取はかどらないやつと彼かの紀見峠きみとげへさしかゝらうといふ麓ふもとの處ところまで來てはや日は、ズツポリ暮くれて仕舞しまつた。見れば杉すぎや檜ひのきの大木おほき、いやが上うへにも生はえ茂しげつて晝ひるでも暗くらいこの山道やまみち、まして月明つきあかりもない晦日みせひの夜よる、たい星ほしの光ひかりりのみは木の間まを泄はれて會あひキラツ／＼と顔かほを見せて居るが、黒白あやめもわかぬ眞まことの闇やみとは恐おそらくこの時ときのこゝとであらう。あたりは森しんとして大地てんちは殆せきんど、死しんだかとも思おもはれる。耳みみをすませば狼おほかみであらうかそれとも山犬やまいぬであらうか 物ものすこい遠吠とほびが、

山やまや谷たにに響ひびき渡わたつて 幽おほかに聞きえてくる様ようだ。

夫それに師走ししうの大晦日おほみそか 今いまでいへば二月にがつの始はじか一月

の末すへの事ことで其時そのときの寒さむざといつたら又またとない時分じぶん。

さすがの商人あまんとも この寂さびしい山道やまみちにさしかゝつて一寸ちよつと小首くびを傾かたけて見みた。けれどもこゝで引ひつ返かへして泊とどつてしまへば、折角せうかくの仕入しにいれ物が大變たいへんな損とんをするは分わかつて居る。まゝよこゝが男をとこの膽きもの試ためし所ところ 一番いちばんこの峠とげを越こす事ことにしよう。

こう決き心こころめてしまつて、さて眞暗まつくらなこの峠とげをこえかゝつた。上あるにつれて坂道さかみちは益ますます益ますますで、草木くさきは益ますます生なひ茂しげり 一歩ひとあし滑すべらさうものなら、夫それこそ千刃ちよんの谷底たにそこへでも落おち込こまうといふ嶮けしい、山坂やまざか、迂餘曲折うよくせつ眞まことに羊腸やうちようたる捷徑しよげいで時ときに滑なる苔こけに足滑あしすべらせては胸むねをさすり、時ときに梢こえを拂はらふ颯々さつさつの音ねにも膽きもを冷ひやかしながら、さてだん／＼峠とげに近ちかく上のぼりか

つて、不圖上の方を咏めた所が、うれしや焚火の光りが見えて 七八人の話し聲も耳に入つた。

『あゝあの人たちも自分と同じ様に、夜通しで此山道を越すのであらう、大坂の方へ行くのか夫とも紀州の方へ越えるのか、何にしても此寒さに焚火にあたることの出来るのは、同よりの御馳走だどれ〜早く行つて温まらせて貰はう』

そこで一段の勇氣を鼓し足の疲も忘れて 峠までかけ付けて、やれ嬉しやと火の側に近ついた。こゝは此山の絶頂で これから段々下り坂とならうといふ所、稍廣い芝生の周圍は老松古杉翁鬱として天を覆うて居る其真中にぞだ打ちくべて煌々として火が盛んに燃えて居る 其火を取り巻いて彼は 十人計りの男が 何かしきりにがや〜と笑つたり話したりしてあつたて居る。

『やゝ御免なさい、どゝも寒くつて〜、少々温まらせて下さいませんか、時にあなた方はこれから どちらへお越しになるのですか』

たいもー 嬉しい一方、何の氣もつかないで ついけさまに しやべりついけなから 重い荷物を肩から 下して 側近く進んで行つた 地獄で佛といふのは この時の商人の心地の様なのを云つたのであらう。

すると大勢の男は 吃驚して一度に顔を見合はせて居つたが やがて其中の一人が

『やゝ温まるがよからう』

とこういつて さて商人の顔から身なりからジ〜ツと見下して又側に置いた荷物をじろ〜眺めて居る。

やれ安心と思つて商人は 大勢の中へ這入つて

疲れた足を押し伸ばし、兩手をかざして、火に温まつて、さて腰の烟草入を取り出し、服吸い付け、吹かし始めた。

大勢の男は暫らく商人の顔を見て居つたが、別に何も話しかけないで、又々自分等話し始めた。今迄は寒さと疲れと、嬉れしさで別に氣か付かなかつたが、だん／＼休まるに従つてよく／＼氣を付けてこの男どもを見た。所か何れも屈強な逞しい大男で、顔は鬚と汚とで埋もれて眞黒く、たい目と齒とか折々白く光つて見えるばかり、如何にも鬼の様な、スハと云は、取つて喰つてかゝりもし相な相格をして、腰の邊りには各自一刀を手挟んで居る。夫から其話しに耳傾けて見て、始めて驚天した。正しくこの者共は山賊追はぎの一群であつたのである。

頼む木蔭に雨か漏るとは、さても此時の事言は、狼の尾を履んで来て、虎の口に臨んだも同じ事だ。商人は路用から荷物は勿論、生命までもないものと斷念した。逃げてでも逃かされるのではなし、詫びたからとて許されるでなし、嗚呼今年は如何なる厄年か知らん、數へて見れば己も丁度四十二、なるほど厄年には旅などするではなかつた。まゝよこれも天命だ、あきらめるより外はない。

物事は諦めて仕舞ふと案外安心なもので、商人は始の程こそ驚天もしたか、今では反つて心か落付いて、平氣で彼等の話をさゝながら、火に温まつて居つた。時は丁度夜の一時か二時、例の山下しといふ身も切れ相な寒風か後からビユ／＼吹き付ける。前は火に温まつてるもの、如何にも後

るの方か冷めて堪らん、で商人はくるりと後向になつて 今度は脊中をわぶりかけた。

暫らく脊中を温めて居ると今度は又々顔か切れ相に寒くなる ハテどーしたものと考えた末、不圖氣かついて、手早く側に置いた荷物から玩具の天狗の面を取り出して顔に冠つた。あゝこれで大分顔の寒さが凌げるわいと思つて 相變らず脊中を火にわぶつて居る。すると、

『どーだ そろ／＼やつ付け様な』

と一人の盜賊がいひ出した。商人は思はずヒヤリツとしたあゝとう／＼やられるのかと思つて吾知らず盜賊の方へ振り返つた。すると盜賊どもは一度に、

『そーら大變だ 逃げる／＼』

取るものも取り敢はず吾一と先を争うて 麓の方

へと散々に逃げうせた。

今殺されるものと決めて居つた商人は 如何にも不思議で堪らぬ。あの様に狼狽て、逃げて仕舞つたのは何故であらうかと よく／＼考へて見た所がおかしや、仮面をかぶつた自分を眞個の天狗だと思つて逃げたのであつた。なるほど、夫も無理はない、見た所蓬々たる白髮に一面の赤顔 口は耳まで裂けて 鼻といつたら素的に高い この眞夜中併もこの深山で 誰か玩具の仮面だと思ふものぞ、賊どもは 確に天狗が人に化けて來たのが 自分等がやつけ様と云つたのを聞いて いさなり正体を顯はしたのだと見て取つて 儲こそ吃驚敗亡 あはてふためいて 逃げて仕舞つたのである 儲も不思議な命を拾つたものかなと思つてさて心を落ち付けて、周邊を見廻はして見ると、何

だか木の枝に袋がぶら下がったものが居る、は大方賊どもが忘れて行つたのだと思ひながら取つて開けて見て又驚いた。其中には大判だの小判だの取り交せて何百兩とも知れぬ大金が這入つて居たのである。

そーこーしてゐる中に、ぼつ／＼東の空が白みかかつて、あちらこちらの森に鳥の鳴き聲が聞こえて来た。もう大丈夫と思つて商人はそこを立つて出たが、今度は下り坂である上に、夜が明けてゐるから歩行くのも早い。急ぎに急いでとう／＼お正月の元日に家へ着いて、家内の者共に途中での事を話しをして、すぐ其金を靴上へ届けた。するとお上でも、これは盗賊どもがどこで取つたのか分らん金だから、お前が正直に届けて出た褒美に下げ渡してやるといふので、何百兩とも知れぬお

金が計らずこの商人の手に入つた。生命を助かつた上に、此大金が手に入つたので、たいさへおめでたい元日に二つも三つもお芽出たが重なつた。

それからこの商人は、夫を資本にして商賣を大きくしたが、だん／＼と儲かつておしまひには非常な大金持になつたが、今でも其時の難儀を忘れない様に、其家のお床の前にチャーンと其時の白い鬚の生けた赤顔の鼻の高い天狗の面を祭つて居ますとさ、めでたし／＼

一口ばなし

奥様「これに鍋や、靴前は近頃田舎から来たのだから、兎角物言ひが悪くって行けませぬ。これからよく氣を付けてね、物を言ふ時には始終「お」の字をつけてお言ひなさいよ」